

言語共同体の形成とルクセンブルク文化の創出

田原 憲和

0. はじめに

欧州評議会は2001年に複言語主義に基づく言語教育政策実現の際にそれを支えるツールとして『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠¹⁾』を提示し、「複言語主義」の概念を提唱した。「複言語主義」のもとでは、個々の言語体験を広げ、「全ての言語能力がその中で何らかの役割を果たすことができるような言語空間を作り出す」ということが言語教育の目的となる²⁾。また、かねてより欧州連合は「母語プラス二言語」を提唱しており、ヨーロッパ諸国における多言語教育はますます促進しつつある。とりわけ、本稿で取り扱うルクセンブルクはこの「母語プラス二言語」を国家として実践しており、成功を収めている国である。

ルクセンブルクは1839年の独立以降、言語的には均質な国家であり、ほぼ全ての地域³⁾で伝統的に母語として話されているのがルクセンブルク語である。ルクセンブルク語は元来モーゼルフランケン方言に属するドイツ語方言の一種に分類されていたが、1984年の「言語法」により正式にフランス語、ドイツ語と並び公用語の1つに、そして唯一の国語として定められたことから、現在では欧州連合やそれに関連する諸機関などもこれを独立した個別言語とみなしている。

本稿では、ルクセンブルクがドイツ語文化圏からいかにして離脱し、独自の文化圏を形成するに至ったかを示すため、ルクセンブルク三大詩人の1人と賞賛されているディックスの活動に焦点を当て、ディックスの活動がルクセンブルク文化確立に寄与した過程とその背景について明

らかにする。また、ルクセンブルク文化に関するさまざまな言説に着目し、ルクセンブルク人の言語意識および民族意識の変化について明らかにしつつ、ルクセンブルクの言語共同体の特徴についても考察する。

1. ルクセンブルクの政治体制の変遷

現在、ルクセンブルクはルクセンブルク大公を元首とする立憲君主制国家である。最長で南北に82km、東西に57kmであり、面積はわずか2,586㎢という小国である⁴⁾。かつてルクセンブルク家はハインリヒ7世(1275-1313：在位1308-1313)やカール4世(1316-1378：在位1355-1378)らの神聖ローマ皇帝⁵⁾を輩出し、中欧に広大な領土を有していた。しかしながら、ヴェンツェル2世の時代にルクセンブルクの地は軽視され、1388年以降のいわゆる「抵当物件時代」を経た後にブルゴーニュの所領となった⁶⁾。その後、スペイン、オーストリア支配を経て1795年には再びフランスの支配下となる。ルクセンブルクが大公国としてこれらの国からの支配を脱したのは、1815年のウィーン会議の後であった。ウィーン会議ではルクセンブルクは大公国として、オランダ王国はベルギーを併合して大オランダ王国となり、ギョームⅠ世がルクセンブルク大公とオランダ王を兼ねる同君連合となった。

ルクセンブルクが大オランダ王国に併合されることなく、特別な地位を与えられたのは、当時の列強による思惑が複雑に絡み合った結果によるものである。すなわち、ウィーン会議の結果かつての神聖ローマ帝国領の一部がプロイセンへ割譲⁷⁾されたことにより、ディレンブルクなどギョームⅠ世の所領の一部がプロイセン領内における飛び地となることから、ギョームⅠ世がこれらを放棄し、その代償としてギョームⅠ世にルクセンブルクの地が彼の個人的な所領として与えられたのである。このような経緯にて、ルクセンブルクは大公国として成立するとともに、

ドイツ連邦にも加盟し、ルクセンブルクの首都にはプロイセン軍が駐屯することとなる。

1830年にはオランダ王国内でベルギー革命が勃発し、ルクセンブルクの住民はこれに同調した。首都だけはプロイセン軍の圧力もあり現状の地位にとどまったが、その他の地域は全てベルギー支配下となる。このような分断国家時代は1839年まで継続する。1839年には領土を縮小して再び独立を果たすが、オランダとの同君連合が解消されたのは1890年になってからである。

このような複雑な歴史的経緯がルクセンブルクの言語状況に一定の影響を及ぼしている。本稿では、とりわけ1815年の大公国成立前後から20世紀初頭にかけての言語状況の枠組みを概観し、現在のような3言語国家として成立しえた背景を探っていく。

2. ベルギー革命前後におけるルクセンブルク

2.1 1815年前後の言語状況

大公国となった1815年当時のルクセンブルクは、東部のドイツ語圏と西部のフランス語圏からなる多言語国家であった。当時はまだルクセンブルク語が個別言語として確立されておらず、ドイツ語の一方言⁸⁾と見なされていたため、東部地域においては書きことばとしては高地ドイツ語、話しことばとしてはドイツ語ルクセンブルク方言が使用されていた。一方で西部地域においては書きことばとしても話しことばとしてもフランス語が用いられていた。人口としてはルクセンブルク語話者がフランス語話者数を上回っていたものの、この時代のルクセンブルクにおける唯一の公用語はフランス語であったこと、東部のエリート層はフランス語を解せるものの西部ではエリート層ですらドイツ語を理解できる者がほとんどいなかったことなどから、当時のルクセンブルクにおいてはド

イツ語よりフランス語の方が優位におかれていたといえる⁹⁾。

この時代のルクセンブルクの公用語はフランス語であったため、東部地域においても行政に関しては原則としてフランス語のみが用いられた。しかしながら、下級官庁に対する文書などではドイツ語も用いられていた¹⁰⁾。東部のドイツ語圏では首都のルクセンブルク市を除いてフランス語があまり浸透しておらず、公務員ですら十分なフランス語能力を有していなかった。それどころか、1830年代においても多くのルクセンブルクの公務員が書きことばとしてのドイツ語能力を十分に有しておらず、公文書の編集に適した人材がいなかったとされているほどである¹¹⁾。

一方で首都のルクセンブルク市では例外的にフランス語も広く用いられていた。既に1704年にはフランス語新聞 *La Clef du Cabinet des Princes de l'Europe ou Journal historique et politique sur les matières du temps* が発行されている。また、1821年に開設されたルクセンブルク初の劇場においても、フランス語による作品のみが上演された¹²⁾。

当時のルクセンブルクはオランダとの同君連合であり、形式的にはオランダ王国とは異なる位置付けであった。しかしながら、オランダ王ギョーム I 世はベルギーと同様にルクセンブルクをオランダ王国の一部として扱ったことから、ルクセンブルクの上級学校におけるドイツ語教育は廃止され、代わってオランダ語が初等教育に導入されるに至った¹³⁾。ただし、教育言語としてドイツ語は依然として使用されており、完全な「オランダ語化」は成功には至らなかった¹⁴⁾。

2.2 ベルギー革命期における言語状況

言語以外の面に関しても、ギョーム I 世はルクセンブルクをオランダと一体的に取り扱おうとしていた。オランダ王ギョーム I 世はオランダ王国の憲法をルクセンブルクにも適用することで、ルクセンブルクを実質的にオランダ王国の支配下に置いたのである。

1815年に大公国となる以前のルクセンブルクは、16世紀後半以来、南ネーデルランドとして一貫してベルギーと運命を共にしてきた。すなわち、16世紀後半にスペイン・ハプスブルク家の支配下に入り、スペイン継承戦争を経て1714年からはオーストリア・ハプスブルク家に、そして1795年から1815年まではフランスの支配を受けた。1815年以降はベルギーがオランダ王国の一部として、ルクセンブルクは大公国として名目上は分離された。しかしながら、上述のようなギョーム I 世の振る舞いは、ルクセンブルクの住民にとってはオランダ王国への帰属というよりもむしろ（オランダの一部をなしている）ベルギーへの復帰と受け止められた¹⁵⁾。

1830年にはオランダ支配への反発から生じたベルギー革命はルクセンブルク全域にまで広がりを見せ、首都のルクセンブルク市を除く地域が全てベルギー支配下となる。首都のルクセンブルク市はプロイセン軍が駐留していたこともあり、軍の圧力で革命の動きを封じてオランダ支配下にとどまることとなる。このベルギー革命勃発の1830年から1839年のロンドン条約締結までの期間、ルクセンブルクはオランダ支配地域（首都ルクセンブルク市）とベルギー支配地域（首都以外の全ルクセンブルク）という分断状態が続いた。この分断期においてはそれぞれの地域で異なる言語政策が施された。

ベルギー革命に続くベルギー独立宣言の後の1830年12月31日、オランダ王はルクセンブルクをオランダ王国とは分離して統治するとの決定を出した。また、1834年には領域性原理によりルクセンブルクにおけるドイツ語の使用も認められた。1835年よりルクセンブルク人はドイツの大学でのみ学ぶことができるという布告をオランダ王（ルクセンブルク大公）が出したものの、ドイツ語の能力不足のためにそれが困難であるということが明るみに出ると、即座にドイツ語が上級学校の授業言語として復活した¹⁶⁾。一方のベルギー支配下にある地域では、1831年にベル

ギー憲法において言語使用の自由が謳われている¹⁷⁾にもかかわらず、1832年には行政言語はフランス語とするという王令が出される¹⁸⁾など、実際には急速にフランス語化が進行した。

2.3 ルクセンブルク・アイデンティティについての論争

このように分断されていた時代のルクセンブルクにおいて、「ルクセンブルク」あるいは「ルクセンブルク人」の在り方について興味深い論争が行われた。ベルギー独立宣言が行われた1830年10月4日からわずか2日後の1830年10月6日、ドイツでもベルギーでもない、ましてやオランダでもない独立した個別の存在としてのルクセンブルクという観点が初めて公式に言及された。オランダ国王（ルクセンブルク大公）の代理として任命されていたルクセンブルク総督のウィルマールによる訓令で、「ルクセンブルク人はこの地に根付いた存在である」と宣言されている¹⁹⁾。ルクセンブルクはベルギーと一体の存在であるか、それとも独自の存在であるかという点について、前者を主張するベルギー派と後者を主張するギョーム派（オランダ派）に分かれて論争が繰り広げられた²⁰⁾。すなわち、ベルギーとの共通の歴史を主張し、その違いやルクセンブルクの独自性については極力避けようとするベルギー派と、「古き良きルクセンブルク」を賛美するギョーム派の論争が、ルクセンブルクの在り方そのものについての議論を巻き起こしたのである。

既に述べたように、1839年のロンドン条約によってルクセンブルクは東西に分割され、東部のドイツ語地域のみがルクセンブルク大公国として独立することとなる。この東西分割により、ルクセンブルクは事実上ドイツ語の単一言語国家となるが、公用語としてのフランス語はそのまま維持された。

3. ディックスの活動とルクセンブルク民族意識

3.1 ディックス以前の文芸活動

ルクセンブルクにおいて、1830年のベルギー革命の動乱期に表出してきた統一的な国民感情が広まったとされるが²¹⁾、ここで生じたとされる統一的な国民感情とは、ベルギーとの共通の歴史に基づく連帯意識、すなわちオランダ支配から脱してベルギーへの回帰を望むという感情であって、ルクセンブルクの独自性あるいはルクセンブルク人としてのアイデンティティに繋がる感情ではなかった。しかしながら、ヴァルター・ポルツィヒ（Walter Porzig）が「言語共同体の存在は人間の共通の行為、つまり文化がそもそも可能であるための第一条件」である²²⁾としているように、フランス語圏を喪失した結果として等質な言語共同体となったことが結果としてルクセンブルク文化創出の原動力となる。

ルクセンブルク語による文芸活動については、1839年以前から散発的に行われてきた。現代ルクセンブルク語で書かれた最も古いものは、1821年4月14日付の *Luxemburger Wochenblatt* に掲載された記事であるが、その後も同誌上で1826年にかけてルクセンブルク語の記事や記述が見られる²³⁾。また、1829年にはアントワヌ・マイヤーによる初のルクセンブルク語による詩集が出されるなど、1830年前後から1840年代にかけての時期はルクセンブルク文化の黎明期ともいえる時期であった²⁴⁾。

3.2 ドイツ性の亜流としてのルクセンブルク性

このように1839年以前よりすでにルクセンブルク語による文芸活動は開始されていたものの、19世紀のルクセンブルクにおいて初めて庶民の娯楽の対象として受け入れられたのはディックス（Dicks）の作品であった²⁵⁾。ディックスは本名をエドモン・ドウ・ラ・フォンテーヌ（Edmond de la Fontaine）といい、現在ではミシェル・レンツ（Michel Lentz）お

よびミシェル・ロダンジュ (Michel Rodange) とともにルクセンブルクの三大詩人として賞賛されているが、当時のディックスは劇作家として著名であった²⁶⁾。

ディックスが本格的に文芸活動を始めたのは1850年代からであるが、当時はまだ言語的あるいは文化的にドイツとルクセンブルクは一体であるという認識が一般的であった。ディックスが1855年に出版したルクセンブルク語正書法の前書き部分においても、ルクセンブルク語について「方言は書きことばとは異なり、一般的な文学的価値を有していない。(中略) 発話されたことばは文字によってようやく明確さと永続性を付与されるのであり、文字によってようやく、ある時代の言語はその特徴を留めたまま保持されるのである」²⁷⁾ とし、あくまでも方言のための正書法という位置付けであった²⁸⁾。また、ペーター・クライン (Peter Klein) も「ルクセンブルク民族は、その言語が示しているように完全にドイツ系である」²⁹⁾ としている。この両者は、前年の1854年に発表されたマイヤーのルクセンブルク語正書法に対して、その表面的あるいは恣意的記述を強く批判³⁰⁾ するなど、ルクセンブルク語について高い価値を見いだしていたほどの人物であるが、彼らをもってですらなおルクセンブルク語をドイツ語と完全に切り離して考えることはできなかった。

1842年にルクセンブルクがドイツ関税同盟に加盟し、ドイツの結びつきをより強固にしたこともあり、庶民や新聞メディアについてはよりいっそうドイツとの同一性を強調していた。マルグによると「民衆は自らがドイツ人のように振る舞い、それとは逆にフランス語に対しては自らの言語であるルクセンブルクのドイツ語(方言)を振りかざすことで自らのルクセンブルク性を示そうとしていた」³¹⁾ とされる。また、1844年刊行のカトリック系新聞 *Luxemburger Zeitung* もルクセンブルク国内におけるドイツ的要素を支持し、1848年刊行の *Luxemburger Wort* は「ルクセンブルク性」におけるドイツ的要素を強調し、「母なる国ドイツ」への

密接な依拠を支持し、上層部で支配的なフランス語をよりいっそう制限しようとしていた³²⁾。

この時代のルクセンブルクは、未だ確固たる民族アイデンティティが存在しなかったといえる。1839年の建国以来10年余りの期間は、ルクセンブルク性をドイツ的なものと結びつけ、ドイツやドイツ文化との連帯を保つためにルクセンブルク語に目が向けられたといってもよい。

3.3 ルクセンブルク・アイデンティティと Gym

拠り所としていたベルギーから切り離され、国土を縮小された中でルクセンブルクとしてのアイデンティティが未だ確立せず揺らいでいる状態にあった1830年代から1840年代は、19世紀初頭のドイツの状態に類似している。当時のドイツはフランス軍に敗北した結果、1806年には神聖ローマ帝国が崩壊し、さらにはプロイセン王国とオーストリア帝国を除きほとんどのドイツ諸侯国はフランス支配下におかれていた。このような時代にドイツで生まれたのが、フリードリッヒ・ルートヴィヒ・ヤーン (Friedrich Ludwig Jahn) によるトゥルネン運動であった。トゥルネン運動は現在の器械体操の原型となったとされているが、これは純粹に身体的修練のみを目的としたものではなかった。民族教育というヤーンの思想を実現する手段の1つとしてトゥルネン運動が存在するのであり、教育によって民族性を身につけさせること、失われつつある国民意識を民族教育によって再び醸成することを目指していた³³⁾。

ルクセンブルクにおいても1849年にニコラ・マルタ (Nicolas Martha) がヤーンのトゥルネンをモデルにした体育協会³⁴⁾を設立した。Gymもトゥルネンと同様に身体の養成と民族精神の強化を目的としており、文化的活動にも力を入れていた。三大詩人の1人であるレンツはGym創設時からのメンバーである。Dicksも同様にGym創設時からのメンバーであるとされることもあるが³⁵⁾、これは誤りで、実際には1855

年に正式に入会が認められている³⁶⁾。

ディックスは Gym の活動を通じ、自らの作品を次々と発表していった。1855 年 2 月から戯曲 *De Scholtcheïn* が、同年 4 月からは *De Koséng oder Schwânz oder Blont* が、さらに 11 月からは *D'Mumm Sës oder De Gësch* が上演されている。これらの作品は高い評価を受けるとともに³⁷⁾、共通ルクセンブルク語の普及にも寄与した。

ルクセンブルク語は大きく 4 つの下位方言に分類できる³⁸⁾。コイナーといわれるルクセンブルク語コイナーの成立過程には諸説あるものの³⁹⁾、ルクセンブルク語コイナーはある特定の言語や方言が権威づけられて広まったものでも、あるいは人為的に共通語を創出したものでもなく、活発な人的交流によって複数の地域方言が調和して生まれたものであるということがいえる。ディックスの大きな功績の 1 つは、コイナーによる創作活動を通じて共通ルクセンブルク語を広く浸透させたことにある。

ディックスは 1856 年以降も Gym を通じて自らの作品を発表し、ルクセンブルクの各地で上演した。ディックスの創作活動と Gym は不可分の関係であったともいえるが、ディックスが Gym の理念や活動に強く共感し、積極的に活動を行っていたといえるかどうかについては疑問の余地がある。ディックスは Gym を自らの作品を発表する場として Gym の活動を利用していただけの可能性も否定できない。しかし、いずれにせよ、ディックスがルクセンブルク文化を重視していたことは明確な事実である。なお、1863 年にはルクセンブルク中西部のエシタナハにも同様の Gym が設立され、ルクセンブルク語作家 André Duchscher が好んで作品を提供する⁴⁰⁾ など、ルクセンブルク語文化が徐々に広まりつつあった。

ディックスはこのような創作活動のかたわら、1857 年から 58 年にかけてことわざ用法集 *Die Luxemburger Sprichwörter und sprichwörtlichen Redensarten* を、1877 年には童謡集 *Die luxemburger Kinderreime* を、1882 年には伝説・伝承集 *Luxemburger Sagen und Legenden* を、1883

年には風俗・慣習集 *Luxemburger Sitten und Bräuche* を編纂するなど、民俗学的活動も行っていた。これらはディックスが自ら収集したものである。このような「ルクセンブルク性」あるいはルクセンブルクの独自性を想起させるものがディックスの手により可視化されることで、それが共通の記憶として（ドイツ文化の垂流ではなく）独自のルクセンブルク文化創出およびルクセンブルク人としての民族意識定着に一定の寄与をしたといえる。

4. ルクセンブルク文化の形成要素

4.1 ルクセンブルクの独自性

三代目のルクセンブルク大公ギョーム三世が男子の継承者なくして1890年に没する。オランダ王国では女子も王位継承が可能であったため、オランダ国王の地位はギョーム三世の娘であるウィルヘルミナに継承された。しかしながら、当時ルクセンブルク大公位の継承権は男子に限定されていた⁴¹⁾ため、ルクセンブルクはオランダ王と同じナッサウ家の系統にあたるナッサウ・ヴァイスブルク家のアドルフを新たな大公として迎えた⁴²⁾。アドルフが四代目のルクセンブルク大公として即位したことで、1815年より続いたオランダ王国との同君連合が解消され、名実共に独立国家となった。

そうした情勢のルクセンブルクにおいて、1896年には国会議員のマティアス・シュポー（Mathias Spoo）がその就任演説をルクセンブルク語で行ったことを契機に、国会でのルクセンブルク語使用を容認するか否かについての論争が起こった⁴³⁾。また、ルクセンブルク語の文法や正書法についてもさまざまな議論が展開された。その中心となったのが *Ons Hémécht* 誌上である。例えば文法や語彙に関しては、1896年第1号から第11号までの11回にわたり連載された「ルクセンブルク語語彙学試論」

(Essai de Lexicologie luxembourgeoise) や 1898 年第 1 号から 1899 年第 2 号までの 14 回にわたり連載された「ルクセンブルクの言語」(Die luxemburgische Sprache) などが、正書法に関しては 1895 年第 7 号から 1896 年第 12 号までのピエール・ブール (Pierre Bourg) による「ルクセンブルク人の方言」(Die Luxemburger Mundart)⁴⁴⁾、1897 年第 1 号掲載のジョゼフ・ヴェーバー (Joseph Weber) による「ルクセンブルク語の正書法について」(Zur Orthographie der luxemburgischen Sprache)、1897 年第 2 号から第 5 号までの 4 回にわたり連載されたカール・コーン (Karl Kohn) による「ルクセンブルク人の方言の正書法への付言」(Ein weiteres Wort zur Orthographie der luxemburger Mundart) などがある⁴⁵⁾。また、1895 年第 2 号には読者からの投稿という形で「我々の方言の正書法の基本と簡略化について」(Zur Grundlegung und Vereinfachung der Orthographie unseres Idioms) という記事も掲載されている。このように、1890 年代から 1900 年頃にかけてルクセンブルク語の独自性を強調する動きが活発化した。同時にルクセンブルク語を客観的に記述する動きも広まりをみせていた。

その一方で、こうしたルクセンブルク (あるいはそれを強調する国民) に対して疑問を投げかける言説もみられた。例えばトニ・ケレン (Tony Kellen) は、ルクセンブルク人はドイツ系ではないという (一般的に広まっている) 考えはおかしく、歴史を学べばその考えについて疑問を感じるはずであるとしている⁴⁶⁾。また、「ルクセンブルク人は自分たちがドイツ系の出自ではなく独自のナショナリティを有していると信じており、今日でさえも、ドイツ、フランス、イギリス、ロシアのナショナリティと並ぶルクセンブルク人ナショナリティなどこの世に存在しないという考えを大半のルクセンブルク人から放棄せしめることはできないであろう」と、強い言葉でルクセンブルク人ナショナリティの存在を否定するとともに、その存在を盲目的に信じているルクセンブルク人に対しても批判

をしている⁴⁷⁾。なお、ケレンは19世紀の初めからフランス性の存在が垣間見えるがドイツ性は排除されているという主張しているが⁴⁸⁾、これはドイツ性の排除というよりはルクセンブルク性の台頭といってもよい。19世紀はルクセンブルク語やルクセンブルク文化がドイツ語やドイツ文化から分立しつつある時代であるので、ドイツ性の積極的な排除とは異なる。また、ルクセンブルク語による文芸活動が興隆していた時期においても、ドイツ語による活動が全く存在しなかったわけではない。例えば1879年にはディックスの代表作 *D'Mumm Sës oder De Gësch* がドイツ語に翻訳されたものが上演されている⁴⁹⁾。

4.2 他の文化との融合性

1900年前後はルクセンブルクの独自性を強調する論調が広く見られたが、複数の文化が融合しているという点にルクセンブルク文化の特徴があるという言説もまたみられた。パティ・ヴェーバー (Batty Weber) はスイスやアルザスといった複数の言語や文化が交錯する地域の例を挙げ、それと比較することでルクセンブルク文化の特徴を論じている。

ヴェーバーは、スイスにおいては各カントンが言語的及び文化的に完全に独立しており、スイスの3言語主義はそれぞれの言語が混交しているわけでも折り重なっているわけでもなく、ただ隣接しているだけであり、表面的な言語交錯に基づくスイスの混交文化は話題にすらすることができないとしている⁵⁰⁾。また、アルザスについてもルクセンブルクとは大きな相違点があることを理解しておかななくてはならないとしている⁵¹⁾。その相違点とは、アルザスでは官庁あるいは古くからのドイツ人移住者からの様々な圧力に対してフランス語が常に戦いを強いられる状態にある一方で、ルクセンブルクにおいてはドイツやフランスの言語あるいは文化は完全に同等のものであるという点だとしている。

また、ルクセンブルクにとって決定的なのは結局のところ2言語ではな

く3言語の国家である点に帰するとし、ルクセンブルク語については、他の地域では民衆の日常言語であるに過ぎない方言がルクセンブルク人にとっては真の母語としての重要性を有しており、プラット（方言）はルクセンブルクにおいては民衆の間だけではなく上流階級社会においても話されているとしている。また、首相や議会の長を招いての議会の正餐においても、参列者との普通の会話で故郷の方言を使用しない者など誰も思い浮かばないという持論を展開し、この点についても、ドイツの各地から採用された役人が高地ドイツ語を定着させようとしているアルザスとは異なるとしている⁵²⁾。そしてヴェーバーは次のような観点からルクセンブルク文化の特徴を論じている。

ではルクセンブルクにおいて本当にフランスとドイツの混交文化(Mischkultur)が形成されているのだろうか？ルクセンブルク人は文化創造者として「特異なもの」とみなされるような文化を創り出したのだろうか？ルクセンブルクの本質において、いったいどのようにして（ルクセンブルク人が自分自身を）ドイツ人に対してフランス的、フランス人に対してドイツ的に装うとするのかということを観察すれば、誰でもほぼそのようなもの（混交文化の存在）を信じてしまいたくなる。しかしそれはこの交錯文化(Kreuzungskultur)が国際的な精神市場において好評を博すかどうかによるのではなく、それ（交錯文化）はもちろん輸出するために（文化が）定められるわけではなく、ルクセンブルク人は全く自分たちのためにそれ（交錯文化）を作り上げたのであり、それ（交錯文化）が彼ら（ルクセンブルク人）にお似合いのものなのである。ルクセンブルクの歴史的発展はこの小国において強く刻印された個人主義を育んだのである。連帯と分断の意識が、どのドイツ民族においてもルクセンブルク人においてほど強く強調されることはない。それは深く根付いて

いる民族宥和の感情である。この中立の地は25万の住民を抱えており、フランス、ドイツ、ベルギーの影響から構成されている文化が彼らの特徴を形成しているのである⁵³⁾。

ヴェーバーはルクセンブルク文化について、ドイツ文化やフランス文化との等距離の関係、そして周辺諸国や文化の相互浸透の結果として生まれた独自の新しい個性であるとしているのである。また、ルクセンブルク人はドイツに対してもフランスに対しても異なる側面を前面に提示することで独自性を主張している点がアイデンティティの揺れに繋がるが、結果的にそれがルクセンブルク人自身のために作り上げた独特な文化を形成していると論じている点が特徴的である。

4.3 ルクセンブルク文化の根幹

ルクセンブルク文化は独自性を有しているか、あるいは他の文化との融合性にこそルクセンブルク文化の根幹があるのかという議論は、最終的には同一の結論に達する。

そもそもルクセンブルクはドイツやフランス、あるいはベルギーの文化が交錯する地であることは疑いの余地はない。元来よりルクセンブルクの地に根付いている文化がドイツ的なものであるのか、あるいはフランス的なものであるのか、あるいは土着のものであるのかという議論はそれほど重要な意味を持たない。どのような観点から文化を規定するか、どのような部分に軸足を置いて文化を考察するかによって結論は異なりうるし、そうして得られた結論は単に視点の相違でしかないからである。

より重要なのは、ルクセンブルク的なもの、ルクセンブルク性というものがどういう過程を経て表出してきたかという点である。1850年代以降のルクセンブルク文化の発見と浸透の背景にあったのは、もちろんディックスを始めとする多くの作家や団体などの活動の存在が大きい。

その根幹には、他律的存在から自律的存在にならざるを得なかったルクセンブルクの国民が、自らの言語や文化を客観視するようになった結果、ルクセンブルク性が浮き彫りになってきたといえることができる。

5. 言語共同体理論におけるルクセンブルク

5.1 言語共同体とは

ルクセンブルクはルクセンブルク語を共通の母語とする単一の言語共同体といわれるが、そもそも言語共同体とはどのようなものの実態を示しているのだろうか。

ドイツの言語学者であるゲオルク・フォン・デア・ガーベレンツ（Georg von der Gabelentz）は、言語と社会の連関の中において、言語共同体と民族共同体は重なるとした上で、それぞれの言語は話者数の多寡に関わらず人々（民族）の共有財産であるとしている⁵⁴⁾。また、当該地域の言語で外国人とコミュニケーションをとることもあり得ることから言語ゲマインデ（Sprachgemeinde）という概念を持ち出し、この言語ゲマインデには当該地域の言語で対話する全ての対話者のみならず、世代を超えて先人にまでその対象が広がるとしている。これは言語ゲマインデ内で世代を超えて受け継がれることわざや民謡、あるいは伝説なども有しているからであるとしている⁵⁵⁾。

また、フェルディナン・ド・ソシュール（Ferdinand de Saussure）も社会的連結は言語共同体を創出する傾向があり、ある程度民族的統一の単位となるのが言語共同体であるとして、言語共同体と民族共同体を結びつけている⁵⁶⁾。社会的連結と言語共同体についてガーベレンツもソシュールに近い見解を示しており、言語共同体は政治的な統一への正当性の根拠となり、言語の多様性は分断への正当性の根拠となるとしている⁵⁷⁾。ただし、ここでいう「言語」とは文章語のことであり、上述の話

しことばに基づく「言語ゲマインデ」と書きことばに基づく「言語共同体」には若干のズレがある。

書きことばと言語共同体を結びつける理論は、ベネディクト・アンダーソン（Benedict Anderson）によっても展開されている。アンダーソンは「出版によって結びつけられたこれらの読者同胞は、こうして、その世俗的で、特定で、可視的な不可視性において、国民的なものと想像される共同体の胚を形成したのである」と、特に印刷言語が共同体形成に及ぼす影響力を強調している⁵⁸⁾。

等質な（あるいは等質となるように規定された）言語はその話者同士を結びつける重要な要因となり、さらにそれが書きことばとして規定され、権威をもつようになると、それが政治的な共同体を作り出す原動力となる。上述の諸理論でも触れられているように、言語共同体とは一定の規範をもった書きことばのもとに想像される心理的韌帯である。

5.2 ルクセンブルクの言語共同体

既に述べたように、19世紀から20世紀にかけてのさまざまな創造的活動により、ルクセンブルクのことばはモーゼルフランケン方言に属するドイツ語ルクセンブルク方言から個別言語たるルクセンブルク語へと分岐してきた。すなわち、ドイツ語という言語共同体からより小さいルクセンブルク語という言語共同体への分化の歴史である。

ガーベレンツは共時的のみならず通時的観点からも言語共同体を規定したが、ルクセンブルクにおいてもディックスによるさまざまな民俗学的著作、すなわちことわざ用法集や伝説・伝承集などの編纂により、通時的な側面からルクセンブルクの言語共同体の想像が支えられるとともに、書きことばの普及によってその民族的な連結が作り出されたといえる。ただし、ルクセンブルクにおいては政治的統一が生まれた後に言語共同体としての実体が形成されていったという点が特徴的であるといえる。

6. まとめ

本稿では、ルクセンブルク文化形成の過程とその背景、そして言語共同体という観点からルクセンブルクの特徴を考察した。ルクセンブルクは歴史的にドイツ語とフランス語が接する位置にあり、それぞれの文化圏の橋渡しの役割を果たしてきた。また、支配者も頻繁に交代し、ルクセンブルクに最も影響を与えた文化は時代によって異なる。そのため、文化的にもさまざまな要素が複雑に交錯する地域であった。

ルクセンブルクの文化はその住民にとっても不可視的なものであり、ルクセンブルク文化の所在の認識は困難なものであった。しかしながら、ディックスをはじめとする作家や Gym などの団体の諸活動を通じ、ルクセンブルク人が自らの文化を客観的に認識するようになった。また、同時に共通の文化を有している範囲、すなわち言語共同体としてのルクセンブルクが可視化されたということもできる。

現在のルクセンブルクは3言語国家であるが、これはまさにドイツおよびフランスという巨大な言語圏あるいは文化圏が重なる地域であったからこそ、その地域特有の言語や文化が「発見」されるに至ったのである。

注

- 1) Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment. 以下『参照枠』とする。なお、2004年には日本語にも翻訳されている。[吉島茂、大橋理枝 編訳『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』]
- 2) 『参照枠』における「複言語主義」についての詳細は吉島・大橋（2004）4－5頁、および西山（2010）27-30頁参照。
- 3) 唯一の例外が人口400人弱のラゾパージュである。伝統的にラゾパージュの住民の母語はフランス語である。
- 4) これは佐賀県の面積とほぼ同じである。

- 5) ルクセンブルク家出身の神聖ローマ皇帝としては、この2人に加えてヴェンツェル 2 世 (1361-1419: 在位 1376-1499) およびジギスムント (1368-1437: 在位 1419-1437) がいる。
- 6) 詳細はトラウシュ (1999) 42 頁参照。
- 7) ビットブルクやシュライデンなど。[トラウシュ (1992) 67-69 頁参照]
- 8) 方言学的に見るとルクセンブルク語はドイツ語のモーゼルフランケン方言と共通の特徴を有している。
- 9) 1839 年にルクセンブルクが言語境界線に従って東西に分割された際の人口は、東部のルクセンブルク語圏の人口が約 17 万人、西部のフランス語圏の人口が約 16 万人であった。ただし、軍事的理由などによりルクセンブルク語圏のアルロンが西部に、フランス語圏のラゾバージュが東部に含められた。[トラウシュ (1999) 82-83 頁]
- 10) Berg (1993) S.14.
- 11) Margue (1937) S.265.
- 12) Berg (1993) S.15.
- 13) Margue (1937) S.262. なお、ドイツ語は後に選択科目として補助的に学習できようになった。
- 14) Nelde (1979) S.27. フランス語系の学校以外においては、学校での第一言語はドイツ語であったとされる。
- 15) Margue (1937) S.262 およびトラウシュ (1999) 72-73 頁参照。
- 16) Berg (1993) S.16.
- 17) Artikel 23. Der Gebrauch der in Belgien üblichen Sprachen ist freigestellt; er kann nur durch das Gesetz geregelt werden und allein für die Akte der öffentlichen Gewalt und für die Gerichtssachen. なお、ベルギー憲法はドイツ語でも出されている。
- 18) Kellen (1889) S.25.
- 19) トラウシュ (1999) 79 頁参照。
- 20) 論争についてはトラウシュ (1999) 78-79 頁に詳しい。
- 21) Margue (1937) S.264.
- 22) Porzig (1950) S.213.
- 23) 記事の詳細等については田原 (2009a) 51 頁あるいは Muller (2004) S.88-95 等を参照。

- 24) この時期の作品については田原 (2010) 4-5 頁参照。また、個々の作家については Christophory (2005) S.27-28 に詳しい。
- 25) ディックスの母語はルクセンブルク語ではなくフランス語であったとする説もある。[Péporté et al. (2010) S.238.]
- 26) 生前に公表されたディックスの詩は僅か 1 篇のみであり、その他の詩はディックスの死後に発見されたものである。なお、1848 年に Volksmund 誌上で発表された D'Vullparlament am Grengewald という詩は匿名であり、没後にこれがディックスの作品であるということが判明した。なお、これは当時の国会議員らに対する風刺詩であるが、当時の首相がディックスの父親のテオドルであったという事情もあり、匿名での発表であったとされる。[Hurt (1938) S.144.]
- 27) de la Fontaine (1855) S.1.
- 28) また、このタイトルも *Versuch über die Orthographie der luxemburger deutschen Mundart* (『ルクセンブルクのドイツ語方言の正書法に関する試み』) としている点からも、「ドイツ語方言としてのルクセンブルク語」という位置付けが分かる。
- 29) Klein (1855) S. iv.
- 30) ディックスからの批判については de la Fontaine (1855) S.2-3 を、クラインからの批判については *Courrier du Grand-Duché de Luxembourg*. N°60. 30 Aout 1854 を参照。
- 31) Margue (1937) S.266.
- 32) *ibid.*
- 33) Jahn (1810) S.10.
- 34) 正式名称は Societé de Gymnastique であり、Gym と略された。本稿においても以下 Gym とする。
- 35) 例えば Friedrich (1987) S.8.
- 36) 1855 年 2 月 28 日付でディックスから Gym に対して出された入会申込書および同年 3 月 11 日付で Gym からディックスに送られた入会許可通知と会費納入の案内が発見されている。[Goetzinger et al. (2009) S.110.]
- 37) 例えば *De Scholtcheïn* に対しては 1855 年 2 月 28 日付 *Courrier du Grand-Duché*、3 月 1 日付 *Revue*、3 月 6 日付 *Trier'sche Zeitung* などにこれを評価する記事が掲載されている。
- 38) Gilles (1999) S.50-59. なお、ルクセンブルク語は基本的にドイツ語のモーゼ

ルフランケン方言と共通の特徴を有しているが、北部方言はリプアリア方言の特徴も有している。

- 39) ルクセンブルクにおけるコイネー議論については田原 (2009b) 4-5 頁に詳しい。
- 40) Péporté (2010) S.239.
- 41) 現在では女子にも継承権が認められている。
- 42) アドルフは 1839 年にナッサウ公を継承しているが、普墺戦争の結果ナッサウ公国がプロイセンに併合されたため、ナッサウ公としては廃位されていた。
- 43) この議論は結局容認しないことで決着がついた。しかしながら、その後、シュボーが発議したルクセンブルク語の初等教育への導入は実行された。[Berg (1993) S.17.]
- 44) 本連載記事には正書法についてだけではなく、文法や発音など多岐にわたる内容が記されている。
- 45) なお、Ons Hémecht 誌は最終的にドイツ語の正書法に基づく方法でルクセンブルク語を記述するように努めると表明している。[Ons Hémecht 1990 N°1, S.1-4.]
- 46) Kellen (1889) S.4.
- 47) *ibid.*
- 48) Kellen (1889) S.25.
- 49) ドイツ語のタイトルは Mutter Suse oder der Geist である。なお、この公演を行ったのは Gym ではなく、ルクセンブルク北部のフィアンデンのタリタ劇場市民劇団であった。
- 50) Weber (1909) S.121.
- 51) *ibid.*
- 52) *ibid.*
- 53) Weber (1909) S.122.
- 54) Gabelentz (1901) S.8.
- 55) *ibid.*
- 56) Saussure (1973) S.305-306.
- 57) Gabelentz (1901) S.56.
- 58) アンダーソン (1997) 84-85 頁。

参考文献

- ジルベール・トラウシュ（1999）『ルクセンブルクの歴史 — 小さな国の大きな歴史 —』（岩崎允彦 訳）刀水書房。
- 田原憲和（2009a）「ルクセンブルク語母音にみるディックスとハルトの言語感覚の親近性」『Seminarium』第31号、大阪市立大学ドイツ文学会。51-74頁。
- 田原憲和（2009b）「ルクセンブルク語コイナーとその正書法 — 都市における共通語創出とその広がり」『都市文化研究』第11号、大阪市立大学都市文化研究センター。2-13頁。
- 田原憲和（2010）「思想としてのルクセンブルク語」『ルクセンブルク学研究』第1号、ルクセンブルク語コイナー研究会。1-20頁。
- 西山教行（2010）「複言語・複文化主義の形成と展開」細川英雄、西山教行 編『複言語・複文化主義とは何か』くろしお出版。22-34頁。
- ベネディクト・アンダーソン（1997）『増補 想像の共同体』白石さや 他訳、NTT出版。
- 吉島茂、大橋理枝 編訳（2004）『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』朝日出版社。
- Berg, Guy（1993）*Mir wëlle bleiwe, wat mir sin.* Max Niemeyer Verlag, Tübingen.
- Christophory, Jul（2005）*Précis d'histoire de la littérature en langue luxembourgeoise.* Éditions Paul Bauler, Luxembourg.
- de la Fontaine, Edmond（1855）*Versuch über die Orthographie der luxemburger deutschen Mundart.* V. Bück. Luxemburg.
- Friedrich, Evy（1987）“Gym” und Dicks. In: *Revue*. Jg.43, Nr.8, S.11, Luxembourg.
- von der Gabelentz, Georg（1995）*Die Sprachwissenschaft – Ihre Aufgaben, Methoden und bisherigen Ergebnisse. Zweite, vermehrte und verbesserte Auflage. (erste Auflage 1901)* Routledge / Thoemmes Press, London.
- Gilles, Peter（1999）*Dialektausgleich im Lëtzebuergeschen.* Max Niemeyer Verlag, Tübingen.
- Goetzinger, Germaine / Muller, Roger / Sahl, Nicole / Weber, Josiane（2009）*Ech sinn e groussen Hexemeeschter. 1823-1891 Dicks.* Centre national de littérature, Mersch.

- Hurt, Joseph (1938) *Theater in Luxemburg*. Jong-Hémecht, Luxemburg.
- Jahn, Friedrich Ludwig (1810) *Deutsche Volkstum*. Niemann und Comp, Lübeck.
- Kellen, Tony (1889) *Deutschtum und Franzosentum in Luxemburg seit den ältesten Zeiten bis auf unsere Tage*. Breithof, Luxemburg.
- Klein, Peter (1855) *Die Sprache der Luxemburger*. V. Buck, Luxemburg.
- Margue, Nicolas (1937) Die Entwicklung des Luxemburger Nationalgefühls von 1780 etwa bis heute. In: *Deutsche Archiv für Landes und Volksforschung*. Nr.1. S.257-272.
- Muller, Roger (2004) War der Initiator lëtzebuurger Dichtung ein Nichtluxemburger? In: *Nos cahiers*. No.2. S.81-114.
- Nelde, Peter Hans (1979) *Volkssprache und Kultursprache*. Franz Steiner Verlag, Wiesbaden.
- Péporté, Pit / Kmec, Sonja / Majerus, Benoît / Margue, Michel (2010) *Inventing Luxembourg. Representations of the Past, Space and Language from the Nineteenth to the Twenty-First Century*. National Cultivation of Culture Brill, Leiden / Boston.
- Porzig, Walter (1950) *Das Wunder der Sprache*. Francke Verlag, München.
- de Saussure, Ferdinand (1916) *Cours de linguistique générale*. Payot, Paris.
- Weber, Batty (1909) Über Mischkultur in Luxemburg. In: *Beilage der Münchener Neuesten Nachrichten*. S.121-124.

